

ゴールボール日本女子代表  
チームトレーナー  
**加藤 瑛美** さん  
インタビュー えのきどいちろう



あなたが子どもの頃に抱いた夢は？ アスリートや一流の指導者が夢を持つことの大切さを語る「夢を信じて」。インタビュアーはコラムニストのえのきどいちろうさん。今回のインタビューゲストは、ゴールボール日本女子チームトレーナー加藤瑛美さんです。

**一緒にいて気づくことを大切にしよう**

——加藤さんのお仕事は？

**加藤** 横浜市スポーツ医科学センターで理学療法士として働いています。もうひとつの勤務として、日本ゴールボール協会にもトレーナーとして派遣されています。

——きっかけは？

**加藤** ゴールボール協会から話をいただいて2015年の8月に初めて代表合宿の練習を見ました。翌月の合宿からはトレーナーとして参加して、11月にはパラリンピック最終予選があり、急ぎよくことになって。「スケジューリングも選手のこと全部まかせるから頼んだよ」と。

——とんとんと拍子に深入りしていったんですね。

**加藤** 最初は本当にわからなくて、選手に「スタッフですか？」と聞いたぐらいでした。

——でも、腹くくるといふか、覚悟してやらないと選手との信頼感は作れない。

**加藤** 見えていない選手、少し見えている選手、選手それぞれがどのくらい見えているのかを聞いて理解して、ひとりひとり、ひとつひとつ確認しながらでした。こう見えてるんだったら、トレーニングでは目の前で動けばわかるかなとか、体の動

きも大きな動きをすれば見えてるなとか。  
——業務としてはどんな事を？

**加藤** 例えばウォーミングアップ。個人であるのか、選手が集まっているのか、そういう管理にはじまって、すべてですね。大会に行けば、何時に起床、何時にコンディションチェック、何時にご飯。チームとしてのスケジュールを立てて、選手におろしたりとか、逆に選手からの意見を貰って、もう一度そこを組み立て直したりとか。

——ひとつのチームやアスリートのピークを作る。ビッグチャレンジじゃないですか。加藤さんはどんな事にこだわったの？これは頑張ってみようと思ったこと。

**加藤** コンディショニングですね。海外遠征ではピュッフェスタイルで食事をする場面があるので、見えていない選手たちにどういうものが用意されていて、栄養としては「これはこうだよ」と会話しながら話していくようにしました。最終予選でピリピリしている時だったので、一緒にいて気づくことを大切にしよう。

——気づきすぎてすぐ大事ですよ。やっつけてないか「ってポーンと言われて、よく知らない世界に行つて。ひとりひとり登場人物が出てきて、みんなキャラが違つて。飛び込んでいくと

とでどどんわかっていく。なんだかドラマみたいですよ。ゼロから急に起承転結が始まった。感動とか、これは泣けたとかそんな経験は？

**加藤** リオのパラリンピックの時、ヘッドコーチが「ベンチにトレーナーを入れたい」と自分もベンチに入る事になりました。でも、選手は限られた時間で勝つためにもトレーナーを入れるよりも相手の分析ができて戦術がわかっている人に入ってもらいたかったと思うんです。

——そうですか。

**加藤** ボールがどこに行つたということはベンチから選手に伝えるんですね。許された時間の中では「ボールがセンターに当たったよ」とは言えないので、「センター、おなか」って短く伝えるんです。「センター手先はじいてる」「センター、足！」って。ボールと手足のギリギリの状況を選手たちが頭で描けるように伝える工夫をしようと考えて。試合の後、選手から「上手だね」と言ってもらえたんです。「すごい！瑛美さんの声は通る」って。

——一緒に戦ってくれてるなあって選手たちはわかるんですよ。うれしいですね。

**加藤** おそらく普通の競技では、トレーナーって医科学部門やサポートする側について、あんまり戦術的なことか技術的なことは関係ないと思うんです。でも、うちはそうじゃない。小さい所帯なんでベンチにも入って一緒に戦う。見えてない選手達の介助って意味でもずっと一緒にご飯を食べに行くのも一緒に、ジムにトレーニングに行くのも一緒に。リオでは選手と一緒に悔しい思いもしました。

**一番いいメダルを獲りたい**

——そして2020年が来ますね。

**加藤** 医科学的な分析の部分もちろんですが、自分もリオを経験したし、チームの中でもいろいろな発言ができるようになってきているからこそ、もっともっとスタッフと選手のあいだに入ってサポートしていききたいですね。コミュニケーションをとること、すごく大事だと思いますね。そして、やっ

ぱり日本で開催するからこそ、いろんな人に見ていただきたいですし、一番いいメダルを獲りたいと思います。ロンドンで金メダルを獲った時のメンバーたちが「あの場所で君が代を聞いた」「すごく熱くなった」という話を今のチームにしてもらえるんです。日本でやるからこそ、いろんなパワーもあるし、いい環境もあるし、注目されるプレッシャーも逆にあるかもしれないですが、そういうすべてを力に変えて。私たちも君が代を聞きたいと思つています。

**取材を終えて**

加藤瑛美さんはキャッチする力のある人だ。ゴールボールのトレーナーとして東京パラリンピックを目指していることも、人の縁や、運をキャッチしたとしか言いようがない。それは彼女の感性の柔らかさだ。よく気が付く。そして邪魔にならない。トレーナーとして選手とふんわりつき合つて、何が必要か感じ取ろうとする。そのアンテナを立てている感覚だ。この人にはそれがある。これからも何かをキャッチしてください。



**PROFILE プロフィール**

**加藤 瑛美 (かとう えみ) さん**  
横浜市スポーツ医科学センター理学療法士であり、ゴールボール女子日本代表専属トレーナーとしても活動。2015IBSAアジア・パシフィックゴールボール選手権大会(中国・杭州市)、リオ2016パラリンピック競技大会に女性初の専属トレーナーとして帯同。今後も東京2020パラリンピック競技大会へ向かうチームを支え続ける。